

農作物技術情報 第5号 水 稲

発行日 平成30年 7月26日
 発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
 編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
 パソコン、携帯電話から「<http://i-agri.net/Index/gate002>」

県全体の出穂期は平年より1日早い8月2日頃と見込まれます。生育状況や気象変動に応じた栽培管理と病害虫の適期防除を心掛けてください。

- 良好な登熟が行われるように適切な水管理を行いましょう。
- 斑点米カメムシ類の薬剤防除は、出穂時期に合わせて適期に行いましょう。
 →病害虫発生予察情報 発生予報第5号(8月予報) (県病害虫防除所 平成30年7月27日発行予定)
- 穂いもち予防は、葉いもち防除の徹底と出穂直前・穂揃期の適期防除が重要です。
 →病害虫発生予察情報 発生予報第5号(8月予報) (県病害虫防除所 平成30年7月27日発行予定)

1 水稻の生育状況と出穂期の予測

移植後、6月第3半旬は気温・日照時間とも平年を下回っていましたが、6月第4半旬以降は気温・日照時間とも平年を上回り、7月は高温多照で経過しています(図1)。6月11日頃(平年差-3日)に梅雨入りした後、降水量は平年よりやや少なく、6月20日頃に梅雨明けした模様です。1ヶ月予報(仙台管区気象台, 7月19日発表)によると、向こう1か月の天気は暖かい空気に覆われやすく、気温は高く、期間の前半はかなり高くなる見込みです。平均気温は高い確率60%、降水量は平年並または少ない確率がともに40%、日照時間は平年並または多い確率がともに40%と予想されています。

県全体平均の幼穂形成期は、7月14日(平年差+1日)と平年並であり、出穂期は平年より1日早い8月2日頃と見込まれます(表1)。水稻の生育ステージをよく観察して、適期管理に努めましよう。

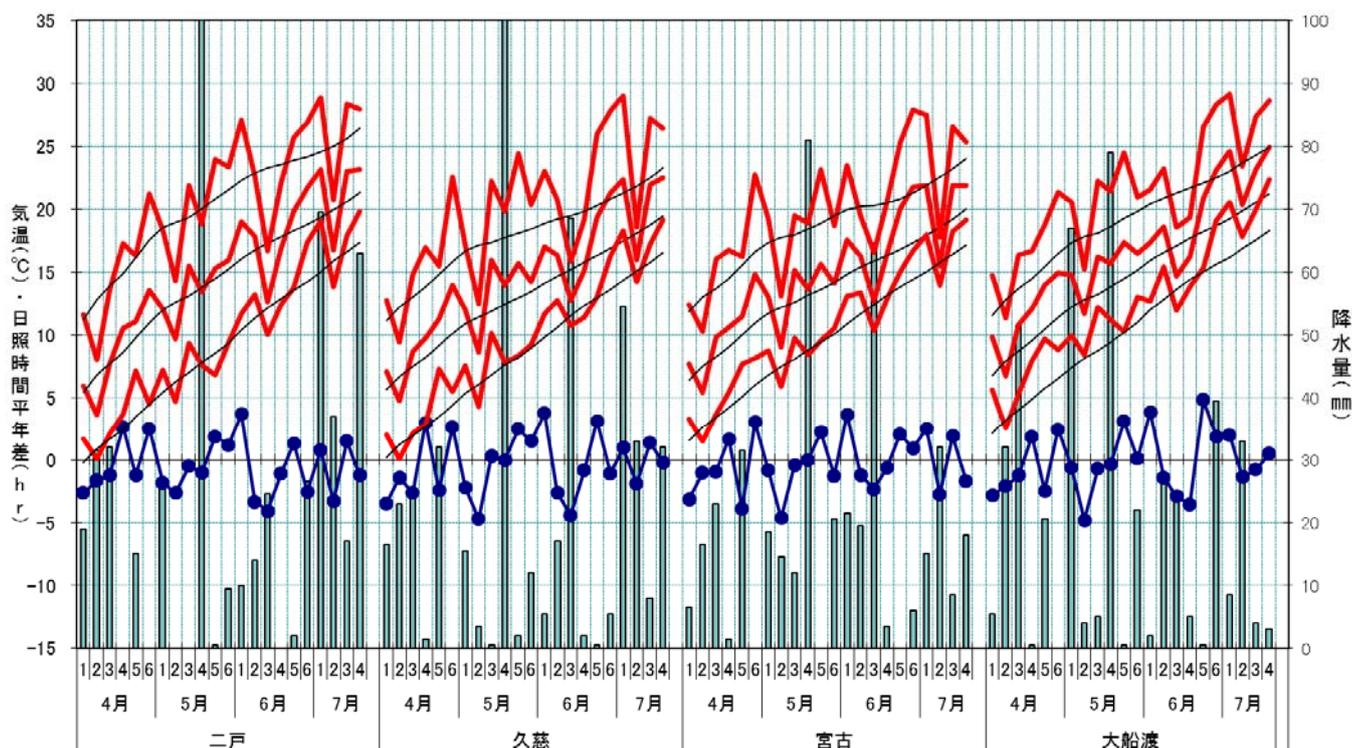


図1-1 主要アメダス地点の気象経過図(沿岸・北部; ~7月第4半旬)

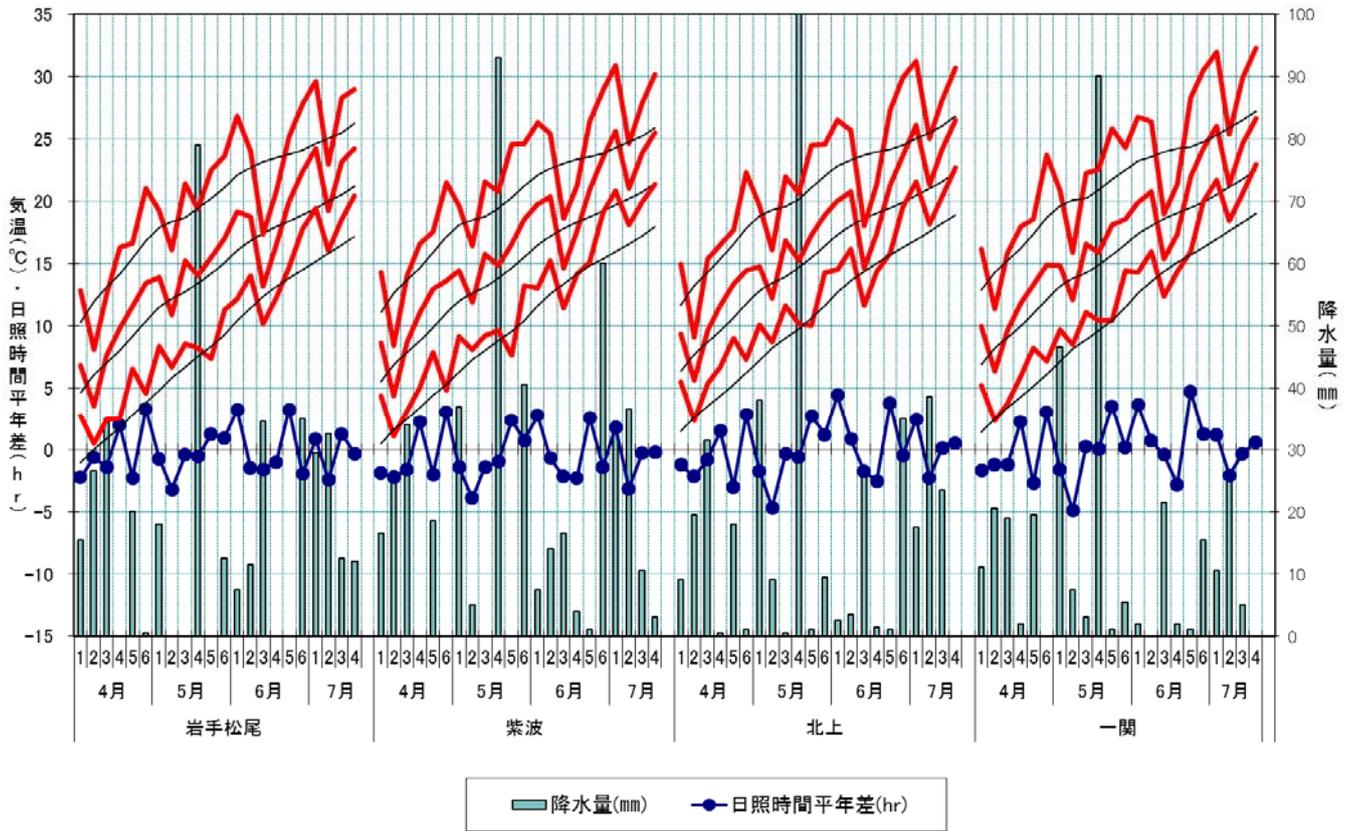


図 1-2 主要アメダス地点の気象経過図（内陸部；～7月第4半旬）

表 1 地帯別・品種別の生育ステージ（水稻生育診断圃：20地点、のべ34品種）

地帯名	幼穂形成期		減数分裂期		出穂期	
	本年(実測値) (月/日)	平年 (月/日)	本年(予測値) (月/日)	平年 (月/日)	本年(予測値) (月/日)	平年 (月/日)
北上川上流	7/15	7/13	7/28	7/25	8/1	8/3
北上川下流	7/11	7/11	7/24	7/22	8/1	8/3
東 部	7/12	7/11	7/25	7/23	8/4	8/4
北 部	7/13	7/11	7/26	7/24	8/3	8/5
全 県	7/14	7/13	7/27	7/24	8/2	8/3
いわてっこ	7/12	7/11	7/25	7/24	8/1	8/5
あきたこまち	7/12	7/12	7/25	7/24	8/3	8/3
銀河のしずく	7/15	—	7/28	—	8/2	—
どんぴしゃり	7/12	7/10	7/25	7/23	8/4	8/3
ひとめぼれ	7/13	7/11	7/26	7/25	8/1	8/5
金色の風	7/12	—	7/25	—	7/30	—

※平年値：H25～29の5ヵ年平均値（ただし、データがない場合はある年次のみの平均）

※減数分裂期の予測は、幼穂形成期から減数分裂期到達までの到達日数（平年値）を本年の幼穂形成期に積算した。

※出穂期の本年予測値：【2018生育ステージ予測支援・水稻作期策定支援シート】により予測（7/21以降の気温が平年並で推移する場合の予測）

2 登熟を低下させない水管理

気象の変化に的確に対応し、登熟を低下させない水管理を心掛けましょう。

(1) 出穂後の水管理

出穂・開花期間中は水を多く必要とする時期です。土壌水分が不足しないようにしてください。開花終了後は間断灌がいを行い、田面が濡れた状態を維持しながら、根の活力を保つよう管理してください。

(2) 気温の高い日が続く場合の水管理（おおむね日中30℃以上、夜間23℃以上の日）

穂揃い後、登熟初期にかけて気温が30℃以上で夜温も高い場合は、水稻の登熟不良や玄米品質の低下（白未熟粒の発生）を招く恐れが高くなりますので、常時湛水とせず間断灌がいを行い、根の活力維持と地温の低下に努めてください。

なお、農業用ダム等で貯水量が不足しそうな場合には、地元の土地改良区等と協議のうえ、効率的に水管理を実施してください。

(3) 落水時期

近年、地耐力を高めて収穫作業を容易にするため、早期から落水して田面が乾きすぎている圃場がみられます。

早期に落水して田面が乾くと、腹白粒の増加や玄米千粒重の低下、強制登熟による胴割れ米等の発生要因となりますので、以下を目安に落水管理を行ってください。（図2, 3）

- ・排水が悪く地く水位が高い水田・・・出穂後30～35日頃
- ・排水が良い水田・・・・・・・・・・・・出穂後35～40日頃

3 病害虫防除対策

(1) 斑点米カメムシ類（斑点米の原因となるカスミカメムシ類）

斑点米カメムシ類の発生時期（加害時期）・発生量ともに「平年並」と予想されます。

（病害虫発生予察情報 発生予報第5号（8月予報）（県病害虫防除所 平成30年7月27日発行予定））

ア 薬剤防除

水田周辺に牧草地などの斑点米カメムシ類の発生源がある場合や、例年斑点米の発生が多い場合は、畦畔を含めて薬剤防除を行ってください。また斑点米カメムシ類の発生が8月末頃まで長引く場合も考えられますので、発生予報などに留意して追加防除の必要性についても検討してください。

(ア) 粉剤・乳剤を使用する場合

- ◆ 基本防除・・・穂揃い7日後に1回防除
 - ◆ 多発条件・・・穂揃い7日後と14日後の2回防除
- ・水田付近に出穂開花中のイネ科植物（特にイタリアンライグラス）を含んだ牧草地、雑草の繁茂地等があり、斑点米カメムシ類の発生密度が高いところ。
- ・水田内にノビエ、イヌホタルイ、シズイなどの雑草が多発しているところ。
- ・割れ籾の多い品種（あきたこまち等）。

(イ) 粒剤を使用する場合（※斑点米カメムシ類の発生密度や水田雑草が多い水田では使用しない）

- ◆ 穂揃期～穂揃い7日後
- ・湛水状態で均一に散布し、4～5日間は湛水状態を保ち落水やかけ流しはしない。

イ 耕種的防除

水稻出穂期以降に畦畔の草刈りを行う場合は、穂揃い1週間後の薬剤散布後、おおむね1週間以内（残効期間内）に行ってください。

【穂揃い7日後とは】

- ・穂の先端が止葉葉鞘の先端を押し開き、少しでも抽出した状態を“出穂”といいます。
- ・水田内で写真のような茎が概ね40～50%見られる状態を「出穂期（盛期）」、80～90%見られる状態を「穂揃期」といいます。
- ・通常、「出穂期」から「穂揃期」までは2～3日程度かかりますので、「穂揃い7日後」とは出穂期から概ね10日後です。



このような穂が40～50%見られる状態を「出穂期」といいます

写真1 出穂のようす

★ミツバチへの危害防止対策★

養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議のうえ、散布時期を事前に知らせるなど、ミツバチへの危害防止を徹底してください。水田周辺にミツバチの巣箱がある時は、巣箱を安全な場所に移動してもらってから薬剤散布を行ってください。薬剤散布の際は、農薬容器のラベルをよく読み、周辺への飛散防止に努めましょう。

(2) 穂いもち

いもち病の発生量は「並」と予想されます。

(病害虫発生予察情報 発生予報第5号(8月予報) (県病害虫防除所 平成30年7月27日発行予定))

7月下旬の葉いもち病の発生圃場率は平年並ですが、7月後半もいもち病菌の感染に好適な条件が出現する見込みです。既に葉いもちの発生が見られていますので、圃場を良く観察し、早期発見に努めてください。

また7月下旬に浸冠水した圃場では、病害に対する抵抗力が低下している可能性があります。穂いもち防除は、発病が見えてからでは手遅れになるので、以下により防除してください。

ア 穂いもち予防剤を使用した場合

上位葉で葉いもちが多発しているところ、出穂後に降雨が続いたり、低温等で出穂～登熟期間が長引く場合には、出穂直前～穂揃い1週間後まで7～10日間隔で茎葉散布による追加防除を実施します。

イ 茎葉散布する場合(穂いもち予防剤を使用していない場合)

出穂直前および穂揃期の2回防除を徹底します。

なお、葉いもち多発時や低温等で出穂から登熟期間が長引く場合は、出穂直前～穂揃い1週間後まで7～10日間隔で追加防除を実施します。

4 異品種混入の防止対策

現在、解析技術の向上により一粒の米からでも品種の判定ができます。

異品種が混入すると、品種名の表示ができず、JAS法表示違反となり産地全体のイメージダウンを招きます。産地の信頼確保のためにも異品種の混入を防ぎましょう。

(1) 出穂期間中の防止対策

出穂が極端に早い、遅い株は異品種の恐れがあります。株ごと抜き取ってください。

(2) 収穫、乾燥、調製時の防止対策

機械や施設内には、前年に収穫した籾等が残っている場合があります。収穫が始まるまでに、余裕を持って機械や施設の点検・清掃を行ってください。

5 直播栽培(鉄コーティング湛水直播栽培)の本田管理

直播栽培の出芽後の本田管理作業は、基本的には移植栽培に準じますが、出穂期や成熟期などの生育ステージが移植栽培より10日～2週間程度遅くなるため、圃場を十分観察し、今後は、病害虫の発生(特にいもち病・斑点米カメムシ類)に注意します。

次号は8月30日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

中央農業改良普及センター県域普及グループは、地域農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。